

岩城準太郎の『明治文学史』と

二葉亭四迷の『小説総論』

川副 国基

明治生まれのわたしだが、中学校（旧制）の上級生になって明治以後の文学史の知識を得たいと思うとき、いちばん参考になったのは高須芳次郎の『日本現代文学十二講』（大正13・1新潮社）という本であった。武円五拾銭という高い定価の本であったが、当時としては、すぐれた、体系的・学問的な解説書で、文学者として実際に明治以後の文学に参与してきた高須の経験や感覚が生きていた。こんにち、もっと高く評価されていい本である。

ところが一種の名著に属する高須のこの本に、その二十年も前に原型を与えた本が

ある。それこそ名著としてこんにちもしばしば回顧される岩城準太郎の『明治文学史』（明治39・12育英社、増補改訂版の刊行は明治42）である。この著は昭和二年にも複製刊行されているが名著だったからである。

この『明治文学史』は、明治十一年生まれの国文学者岩城準太郎（最後には奈良女高師―奈良女子大の教授となって昭和三十三年には病没した）が、東京帝大の国文学科を卒業してからまだ数年しかたっていない二十八歳のときの著述である。多分、岩城が三重県立一中の教諭から金沢の第四高

等学校の教授となって赴任するころの出版で、若き日のまことにおどろくべき業績である。

それまでの文学史といえは、まず、文学者をひとりひとりあげて説明するとか、あるいは、文学書を並べたてて書誌的に解説していくとかといったことにとどまった無味乾燥なものであった。時代とか、文芸思潮の推移とか、そういうものを背景にしての文学史は書かれなかった。フランスのテーヌの文学史の方法などに影響されてその方法をわが国の文学史の解明にも適用してみようという新しさを持った東大の国文学科の教師には藤岡作太郎しかいなかった。藤岡は病没の五年前の明治三十八年にその有名な『国文学全史 平安朝篇』を刊行するのであった。藤岡に学んだ岩城のこの文学史には時代と環境に関してのテーヌ的な着目があり、まことに斬新な風があった。時代的な区分も妥当なものがあつたし、また作品の評価もそれほどのをはずしたのもすくなかった。そういう点に岩城の学問的感覚の秀拔さが十分にうかがえる

ものであった。前記高須の『日本現代文学十二講』ももちろん、先駆的なこの『明治文学史』の構想に大いに負うところがあつたわけだ。しかし中学生のわたしは、まだ岩城の『明治文学史』へまで遡源していくことを知らなかった。ひたすら高須の本を大切にし愛読した。

岩城の『明治文学史』はいまや古典的名著のひとつになったが、その後六十数年を経たことでもあるし、日進月歩の近代文学研究のこんにちの到達点から見ると修正すべき個処がいくつもある。きわめて近い時代の文学を対象にしたせいでもあるし、また資料の探索とか整備とかが十分でなかったせいでもある。いまそのひとつをとりあげて考えてみよう。

岩城の『明治文学史』では、坪内逍遙の『小説神髓』を高く評価している。『小説神髓』については高山樗牛の『明治の小説』（明治30・6「太陽」）が高く認めており、岩城の着目をはじめというわけではない。樗牛の『明治の小説』は岩城の『明治

文学史』にかなりの影響を与えているようだ。さて岩城は、この逍遙の評論『小説神髓』と小説『三歌当世書生氣質』と二葉亭四迷の小説『浮雲』の三つの関渉について

「『小説神髓』の所説を最忠実に体認して純粹なる新時代模写小説の範となりしは『書生氣質』に非ずして『浮雲』なり」

と書いている。このことをわかりやすく説明すると

「『小説神髓』は、小説の主腦を人情とし世態・風俗これに次ぐといい、その描きかたは、ただ傍観してありのままに写すところの模写（写実）主義によるべきだ、としたものであったが、しかし、逍遙みずからの小説『書生氣質』は、その逍遙みずからの小説創作上の主張を十分に実践することができなかった、実践できたのはむしろ二葉亭四迷の『浮雲』であった」

といているのである。

『浮雲』が逍遙の『小説神髓』のなかの小説作法の主張の具現化されたものである

というこの岩城説はその後、ながい間、文学史上の定説とされてきた。しかし、この岩城説は当時まだ岩城が、二葉亭四迷に「小説総論」という文学論・小説論があることに気づかなかつたことからきた謬説であるということがこんにちでは明かになってきた。

逍遙の『小説神髓』（明治18・9～19・

4 全九分冊）が刊行されはじめたとき、

もっとも熱心な読者のひとりには二葉亭四迷であった。当時の二葉亭は当時のロシアの文学評論や小説を味読しそこから自分としての文学論・小説論を頭のなかにまとめつつあった。もちろん当時のロシア第一の評論家であったベリンスキーらの文学論に大いに示唆を与えられながらである。『小説神髓』を一冊ずつ読んでいきながら二葉亭は逍遙の論に疑義を感じるがすくなくなかった。思いきって二葉亭が逍遙をたずねてその疑義をただしたのは明治十九年一月二十五日が最初だとされている。まだ『小説神髓』は全部は出版されていない時期であった。自分よりも五つも歳の若い二

葉亭の文学論を聞きながら逍遙は心中、大いに動搖を禁じ得なかつた。その二葉亭の文学論には逍遙もなるほど傾聴せざるを得ないようなものがいくつもあつた。逍遙は二葉亭に、その包蔵する文学論をまとめてみるようにすすめた。こうして二葉亭の

「小説総論」と題した、ペリンスキーの文学論に依拠した小論は十九年四月の「中央学術雑誌」(第26号)に「冷々亭主人」の名で掲げられた。近代文学の特色として逍遙も強く着眼した「模写主義」については

「実相を仮りて虚相を写し出すといふことなり」と、逍遙の論よりもずっと徹底した近代的写実論を開陳している。「中央学術雑誌」というのは逍遙が教師をしていた東京専門学校(いまの早稲田大学の前身)の同政会という団体の機関誌で明治十八年三月十日に創刊された半月刊のものであつた。二葉亭の「小説総論」が掲げられる前には高田半峯の有名な「当世書生氣質の批評」(わが国最初の近代的作品評といわれている)や「佳人之奇遇批評」などが掲載されてきた。しかし、一学校の研究誌とい

つたものであつたのでひろく流布することがなく、二葉亭の折角の注目すべき「小説総論」も世に知られることすくないままに埋没してしまつたかたちになつたのであつた。

この二葉亭の「小説総論」を、わたしどもも手にして読むことができるようになったのは、この小論が『明治文化全集』(全二十四巻・昭和2—5・日本評論社)のなかに収められたことによつてである。

『明治文化全集』は吉野作造を中心に木村毅・柳田泉などが結成した「明治文化研究会」が編纂したものですでに稀覯本となつた明治の文献を複製し紹介した功績にはまことに大きいものがあつた。欧米の大学で、東洋文化の研究に力を注いでいるところには必ずこの『明治文化全集』と『福沢諭吉全集』が備えてあることにわたしは一驚を喫した思い出がある。

「小説総論」を読んでみると、これは文学の本質を論じているが、逍遙の『当世書生氣質』をはるかに抜いた二葉亭の『浮雲』の写実は、「小説総論」に示されてい

る写実論が土台になつてゐることが考えられてくる。こんにちでは、二葉亭の『浮雲』は、二葉亭の文学論である「小説総論」から生まれだつたものであつて、『小説神髓』から生まれだつたものではないことが、確定的なかたちで考えられるようになってきた。すなわち定説となつてきた。

資料の発掘とその整理・体系づけも学問研究上まことに大切なことである。岩城ほどの研究者も、二葉亭に「小説総論」という二葉亭自身の写実論があつたことにながく気づかず、文学史の考えかたの上にあやまりをおかしたのである。岩城が「小説総論」の存在に気づいたのは、おそらくやはり前記「明治文化全集」の刊行によつてではなかつたかと思う。そして、岩城がこの二葉亭の「小説総論」について書いたのは、戦後刊行の著書である「近代日本文学の黎明」(昭22)がはじめてであるのかもしれない。